

平成21年度能美市地域福祉活動計画
第4回アクションプラン推進協議会及び第4回評価委員会

日時：平成21年11月17日（火）午後7時30分～

場所：辰口健康福祉センター

出席者：高塚亮三（福祉施設等）、西川方敏（市ボランティア連絡協議会）、井上徹（市民生
委員児童委員協議会）、澤田時弘（市町会長連合会）、宮田明（市自治公民館協議会）、
南昭憲（市自治公民館協議会）喜多泉（子育てに関わる団体）、近藤沙夜里（一般公
募）、田中邦一（学識経験者）、荒井昌宏（学識経験者）

事務局：宮本会長、宮田事務局長、新川、海道、南野、谷

1. 開会の挨拶（西川副会長）

A Pについて、各委員会で地域福祉活動を進める上で、いろいろと工夫され、どのよう
にしたらよいか、協議しているところだと思う。私は、他の委員会に参加し、自分の委
員会とは違った進め方や工夫をされていることを目の当たりにして、勉強になった。こ
の推進協議会も、他の委員会の報告や意見を聞ける機会なので、お互いのプラスにし相
乗効果で、地域福祉活動を進めていければと思う。

2. 各A P委員会からの報告・・・資料1参照（資料1参照・補足説明）

私たちのボランティアセンターづくり委員会

西川：（資料1参照・補足説明なし）

NWづくり委員会

井上：（資料1参照・補足説明なし）

支えあいのしくみづくり委員会（資料1参照・下記補足説明）

喜多：昨年度の地域福祉フォーラムで取り組んだ寸劇（市民向け啓発・PR用）を依頼
があれば、いつでもできるようにしておくため、練習している。地域福祉推進の
マスコット「のみんちゃん」が中心となる寸劇なので「のみん劇団」と名付けた。

人づくり委員会（資料1参照・下記補足説明）

高塚：8月30日にふれあい踊りの夕べを開催する予定で事業予算もついていたが、会
場となる根上北部児童センターの学童クラブが新型インフルエンザ感染となり、
センター閉鎖を受けて、開催が延期となった。経過をみていたが、インフルエン
ザの猛威が拡大してきているため、今年度の開催を見送ることになった。

西川：4つのA P委員会に対して質問・意見等はいかがか。

澤田：認知症サポーター養成講座について、先日、私の地元浜開発町のいきいきサロ
ンに、はまなすの丘の介護職員3人の方に来てもらい、認知症について、寸劇も入
れて話をしてもらった。堅苦しい話ではなく、高齢者でも聞きやすい内容で大変、

喜ばれていた。市内でこのような認知症講座をどんどん開催してもらい、もっと市民に理解してもらいたい。

高塚：市民には、認知症サポーターという意味がもう一つ理解されていないところがあり、その辺のところをもう少し話し合っていかなければならない。認知症サポーターというのは、認知症の方に積極的に支援するなど何かしなければならないということではなく、認知症の方を理解することだと広めていきたい。

西川：人づくり委員会の報告で、「地域福祉活動計画に示されていない地域福祉を推進する新しい事業やグループ」ということ、また「現在の社会がどのような福祉のサービスや活動ができるのかを考える」というのは、具体的に何かをイメージされて協議されたのか。

高塚：実際に活動計画に示されていない福祉活動はあるわけで、例えば市内の介護事業所が独自に行う行事などがある。その中で人づくり委員会としては、活動計画に足りない部分としてどう取り入れていくかという視点が必要ではないかということである。

西川：現在、具体的な福祉活動は思いあたるのか。

事務局：資料1に挙げている「障害を地域で考える意見交換会」というのは、「ともろっさ・能美」という名称で先日、立ち上がった動きです。また「孫世代のための認知症講座」は、ボランティアグループチーム20とNPO法人の共催で行われた事業で、これらの活動も福祉の人づくりに結びつくことから、人づくり委員会で報告された。

高塚：地域福祉の観点からいうと、一人一人、福祉の網から漏れない・漏らさない活動を目指して計画を立て、それを遂行していくことである。いろいろな、ふれあい福祉事業を開催していくにあたって、どうしても参加者だけに目が向きがちになる。だけど、参加できない人をいかに参加できるように導くか、参加を拒絶する人の思いを汲み取ることに地域福祉活動計画の本当の意味があるのではないかと思う。

西川：他に、報告内容に対して質問・意見等はあるか。

高塚：第5回能美市社会福祉大会だが、今回は、市社協から私に大会宣言の話があり、前年度までの、基本となる大会宣言に私の思いを入れてつくった。そのこともあり、私は、日々、その宣言を自分に言い聞かせながら活動している。大会宣言のあり方については、どこで、どのようにつくるか、協議する方が良いと思うが、このAP推進協議会を含め、どのような場をつくるべきか、事前の合意形成が必要ではないか。大会宣言が、単に、セレモニーとなるのではなく、そ

の後の能美市の地域福祉の方向性を示すようになればと思う。

事務局：前回9月29日のAP推進協議会で大会宣言を提示し、確認することにとどまった。次年度からは大会宣言について、作成手順や内容を協議し決定する場をきちんとしていきたい。

3. 能美市民ちいきふくしウィーク（案）について・・・資料2・3参照

事務局：名称については、前回から引き続き、資料では仮称で提示している。まず、名称をどうするか、時間としては、1コマ2時間程度ということでのよいのかを協議して決定していただきたい。

喜多：資料2の日程（案）の支え合いのしくみづくり委員会の企画を訂正する。まだ、企画段階ではあるが、「絵本の読み聞かせ」ではなく、「お茶会」というものでもない。「お茶を飲める絵本サロン」という場の設定である。基本は、1コマ2時間という案となっているが、私たちの委員会の企画は10時から15時の時間帯を想定しており、「のみん劇団」の寸劇を午前・午後と2回したいと思っている。

西川：日程については、この場で、希望日とある程度の時間帯を出した方がよいのか。

事務局：日程が各AP委員会で重ならないように決めてもらえたらということである。

高塚：最初の2月28日の企画は、学びフェスタの分科会の一つになり、学びフェスタ用に新しく立ち上げる実行委員会が担当する。人づくり委員会が、そのままその実行委員会とはならないことを確認している。

事務局：基本的にこの場所で日程案が、合意となれば、これでいくことになる。3月3日に出されている（案）で社協ボランティアセンター企画の福祉協力校の活動報告についても、入れることでよいのかどうか。

喜多：辰口中央小の方は、了解しているのか。

事務局：現時点では、担当教諭に話をもち掛けた段階である。総合学習の時間に福祉体験をしており、生徒が、その体験から得たことをクラスで発表していて、その発表をちいきふくしウィークの中でも発表していただけないかとお話を学校側に持ち掛けたいということで、この（案）もこの場で諮ってもらいたい。

宮田：発表するというのは、どういう人を対象とするのか。

事務局：学校では、生徒同士で発表しているが、この（案）として福祉教育や福祉体験に関心のある一般の方、またそのようなことに関わるボランティアの方など広

く市民に向けた発表を想定している。

高塚：人づくり委員会のAPの一つに福祉教育の研究会の立ち上げが、初年度からあったが、これが今年度も手つかずになっている。しかし、実際に福祉教育は、行われているわけで、学校側を巻き込んで進めたいと考えているが、多忙な方ばかりで着手するのが難しい状況である。そこで、この（案）を踏まえて、今後の方向性を見極めていければと思う。

西川：社協の福祉協力校助成事業のサポートは、ボランティアセンターの活動事業の内容にもなっている。社協提案の企画は、福祉協力校の報告・発表であり、我々がそれを受ける場合は、ボランティアをしているという意識を持ってもらいつつ、あまり言い方は良くないが、その活動を褒めるような関わりとなるのか。そういったボランティア体験や生徒との交流の機会などノウハウを蓄積していくことになると、人づくり委員会の福祉教育の研究会の立ち上げになる。

高塚：学校教育ということになると、評価ということが出てくる。そうになると教科としてはなじまない。学校教育で行ったとしても、今までの教科と同じような評価ではなしに、別のかたちにすべきではないか。

事務局：福祉協力校の活動は、総合学習の時間に行っており、障害者や高齢者への理解を深めるなど、いろんなテーマを持って行っており、おそらく、この（案）での児童の発表は、車いすとかアイマスクの福祉体験や障害を持つ方のお話を聞いての感想などの実践報告になろうかと思う。

西川：総合学習として扱うとなると、評価というのはどうなるのか。

高塚：現状では、評価ということでは触れられていないと思うが、教員の間では、評価をどうしようかという悩みを持っていると聞いたことがある。詰まった学習カリキュラムの中で、行っているので、きちんと評価すべきではないかという思いもあったり、福祉教育に関わらない方の中には、もっと他のことをしたらどうかという思いもあると思う。

西川：教育の現場でそんな問題意識があるのであれば、研究会の立ち上げを呼び掛ければ参加もあるのではないか。

高塚：そう簡単にはいかず、現状の教育現場は手いっぱいということなので、学校とは違う方面から方向性を出していくか、OBか教育委員会などの中で何かの取り組みと協働しながらできないかと思う。

喜多：今の教育現場を考えたら、少し無理があり、学校の中の一つの分野として捉えると、教員にとっても、子どもにとっても、良いものにならないような気がする。

る。(案)のように、一つの学校とか、いくつかの特定の学校に入っていくとか、少しずつ、少人数でもいいから、体験者や理解している生徒を増やすということを学校以外から進めていくことが、AP委員会の役割ではないか。この(案)で学校側が了承しているのであれば、生徒が福祉体験をした感想やその時の写真を聞いたり、見たりすることで、参加する市民への啓発になる。

高塚：人づくり委員会は、福祉教育の研究会を立ち上げようということなので、具体的なプログラムをつくるというのではなく、福祉教育のあり方や方向性について協議はあってよいのではないか。

事務局：福祉教育というとすぐに学校というイメージをしがちであるが、生涯学習と捉えるならば、一般市民、その中に子どもたちも巻き込んだかたちの福祉教育ということもあり得るのではないか。

高塚：あらためて確認しておきたいが、活動計画冊子の中の体系図(P12)の人づくり委員会のAPには「地域と学校の連携による研究会の立ち上げ」と示しているので、単に生涯学習として捉えるのは少し違う気がする。教育委員会もある程度入ってきてもらわないと進まないと思う。

宮田：基本的なことを押さえたいが、福祉協力校というのは、能美市の指定なのか、石川県の指定なのか。

事務局：県の指定もあるが、能美市の指定として、市内の小学校、中学校、寺井高校の全校に毎年度ごとに助成して協力校として活動してもらっている。

西川：今、みなさんから出された意見をふまえて、この(案)で進めるとして、辰口中央小の発表の後に学校における福祉教育のあり方などの話し合いにつなげていくことは、可能なのか。

事務局：それは、今後の学校側との調整になるかと思う。

高塚：この(案)については、授業参観のようになってもいいと思うが、この機会に、ちいきふくしウィークとは別に話し合いの場をつくっても良いかもしれない。

事務局：その話し合いの場は、テーマがとても深いので、ちいきふくしウィークの後か、次年度でも良いかと思う。

西川：福祉教育の研究会といっても、学校を中心にするのか、もっと広い範囲の福祉教育と捉えるのか、まだ方向性が見えないわけで、それを決めてから動くというよりは、この企画のような機会をとらえて、学校における福祉教育はどうあるべきかを協議することができれば、今後、どういうふうな研究会を立ち上げ

ていくかという視点が出てきたり、材料集めができるのではないか。

高塚：人づくり委員会としては、この企画をヒントにまた協議していきたいと思う。

事務局：それでは、今後の周知・PRのこともあるので、仮称としている「よろっさ やろっさ つなごっさ！能美市民ちいきふくしウィーク」という名称はどうか、この場で協議してもらいたい。

荒井：「能美市民」と頭に来ているが、少し硬いというか、重くはないか。

喜多：「能美市民ちいきふくし」の部分を外して、「よろっさ やろっさ つなごっさ ウィーク」はどうか。

宮田：それだと何のイベントだかわからない感じがする。

喜多：「地域福祉」という言葉になかなか入っていけない人がいるので、それを前面に出さず、「何かで人が集まって、一緒につながるんだ」というイメージが良い。

西川：あと考慮すべき点は、毎年、1週間として開催する可能性があるのか。

喜多：同じように毎年開催していくという確認はまだしていない。今年度は、1週間の開催として試みるという認識である。

近藤：「よろっさ やろっさ つなごっさウィーク」に少し内容がわかるようにサブタイトルをつけたらどうか。

喜多：サブタイトルに「語り合おう」というのを入れたいと思うが・・・「語り合おう！みんなのちいきふくし～」というのはいかがでしょうか。

合意決定

「よろっさ やろっさ つなごっさウィーク ～語り合おう！みんなのちいきふくし～」

事務局：(資料3の予算説明)

予算配分については、事務局が各AP委員会と連絡・調整する。

4. 今後の予定

次回AP推進協議会の開催

日時：平成22年1月15日（金）午後7時30分～

場所：辰口健康福祉センター

5. 閉会の挨拶

高塚：地域福祉活動計画が、着実に積み上がって行って、市民に定着していけるような活動にしていかななくてはいけない。そういう意味でみなさんと協力して「よろっさ やろっさ つなごっさウィーク」を何とか成功させたいと思う。

※ 文中の略については以下のとおり

AP：アクションプラン

NW：ネットワーク